

# 夕暮の「待つ恋」の歌

—中国閨怨詩との異同を中心に—

金 中

## はじめに

夕暮に、濃密な恋情の高揚が伴うのは普通である。日本の古代社会では「妻問い」という習俗により、夕暮は男性が女性の家を訪ねる時間になっている。

周知のように、和歌の世界では平安以降、中国の「閨怨詩」の影響により、女性の立場による「待つ恋」の歌が大幅に増えている。本発表は八代集における夕暮の「待つ恋」の歌を考察し、中国文学や万葉集との対比からその特徴を示すものである。

## 1 古今集

古今集に登場する夕暮の「待つ恋」の歌は3首あり、いずれも恋の終焉を意味する恋五巻に配置されている。

題しらず

来めやとは思ふ物からひぐらしのなく夕暮は立ち待たれつつ<sup>1)</sup>

(古今・恋五・772・よみ人しらず)

題しらず

来ぬ人を松夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ

(古今・恋五・777・よみ人しらず)

この2首では、作中の女性が「ひぐらし」の鳴き声と「秋風」に寂寥感を引

き立てられ、待つことの空しさを嘆息している。「来めやとは思ふ物から」「来ぬ人を」といった表現から、最初から男の訪れを断念していることが窺われる。<sup>2)</sup>  
「恋五」巻の終末部分に配置される、

題しらず

夕されば人なき床をうち払ひ嘆かむためとなれる我が身か

(古今・恋五・815・よみ人しらず)

という歌が注目に値する。作中の女性は、嘆くために存在する我が身を悲嘆し、男の訪れに対して全く絶望的である。「夕されば人なき床をうち払ひ」という上句は、『玉台新詠』巻六所収の何思澄「奉和湘東王教班婕妤」(「湘東王の教に奉和す班婕妤」)に見える、

寂寂長信晩、雀声喧洞房  
蜘蛛網高閣、駁薛被長廊  
虚殿簾帷静、閑階花蕊香  
悠悠視日暮、還復空空床

せきせき ちやうしん じゃくせいどうぼう かまびす  
寂寂たり長信の晩、雀声洞房に喧し  
ちちゆ かうかく あみ はくせんちやうらう かみむ  
蜘蛛高閣に網し、駁薛長廊に被る  
きよでん れん あ かんかいくわすみかんば  
虚殿簾帷静かに、閑階花蕊香し  
いういう み かへ いうしやう ほら  
悠悠日の暮るるを視、還りて復た空床を払ふ

「悠悠日の暮るるを視、還りて復た空床を払ふ」を直接的に摂取したものと考えられる。なお、全体的には、古今集815番歌はむしろ『芸文類聚』の「哀傷部」に所収する魏・丁廙の妻「寡婦賦」に見える、

時翳翳以東陰  
日臺臺以西墜  
鷄斂翼以登棲  
雀分散以赴肆  
還空床以下帷

えいえい くも  
時は翳翳として以て東に陰り  
び お  
日は臺臺として以て西に墜つ  
ねぐら  
鷄は翼を斂めて以て棲に登り  
ぶんさん やどり  
雀分散して以て肆に赴く  
かうしやう かへ とばり おろ  
空床に還りて以て帷を下し

払衾褥以安寐

.....

仰皇天而嘆息

腸一日而九結

惟人生於世上

若馳驥之過櫓

きんじょく  
衾褥を払ひて以て寐を安んず  
ねむり やす

.....

くわうてん  
皇天を仰ぎて嘆息す

はらわたいちじつ きうけつ  
腸 一日にして九結す

せじょう  
惟だ人世上に生れ

ち き れんじ ごと  
馳驥の櫓を過ぐるが若し

との共通性が高い。<sup>3)</sup>

つまり、古今集815番歌は何思澄「奉和湘東王教班婕妤」と丁廙の妻「寡婦賦」の影響を同時に受けており、閨怨と哀傷の題材が複合された作品と言える。中国の閨怨詩以上に、濃厚な絶望感が流露されていることが示唆的である。

## 2 古今集以降

古今集に見られる夕暮の「待つ恋」の歌は女性の悲哀寂寥感を歌い、また、男の訪れに対する絶望感が流露されている。それ以降の歌は、基本的に古今集のこの方向で読まれたものである。

題しらず

夕されば我が身のみこそ悲しけれいづれの方に枕定めむ

(後撰・恋三・739・藤原兼茂女)

ひとり侍りけるころ、人のもとより「いかにぞ」ととぶらひて侍りければ、あさがほの花につけてつかはしける

夕暮の寂しき物は槿の花をたのめる宿にぞありける

(後撰・雑四・1288・よみ人しらず)

この2首の後撰歌においては「悲し」や「寂し」と、待つ女性の悲哀寂寥感が表出される。前歌では枕の方向によって男と夢での逢瀬が期待され、後歌で

はそのまま朝顔の咲く朝の訪れが待たれる。いずれも男の訪れに対する諦めの心情が窺われる。

題しらず

うたた寝の夢に逢ひ見てのちよりは人も頼めぬ暮れぞ待たる

(千載・恋二・738・源慶)

夢中契恋といへる心をよめる

見し夢の覚めぬやがてのうつつにてけふと頼めし暮れを待たばや

(千載・恋三・835・小侍従)

摂政右大臣時、家歌合に、恋の心をよめる

思ひ寝の夢になぐさむ恋なれば逢はねど暮れの空ぞ待たる

(千載・恋四・898・丹後)

この3首の千載歌は後撰集739番歌に共通し、「人も頼めぬ」「けふと頼めし暮れを待たばや」「逢はねど」といった表現から、待つ女性が現実での逢瀬に対しては諦め、専ら夢での逢瀬に期待をかけていることが言えよう。

大江公資に忘られてよめる

夕暮はまたれしものをいまはただ行くらむかたを思ひこそやれ

(詞花・恋下・270・相模)

百首歌めしける時、恋歌とてよませたまうける

何せむに空頼めとて恨みけん思ひ絶えたる暮れもありけり

(千載・恋五・944・上西門院兵衛)

前歌では、今になってはただ男の訪ねるほかの女性の方角を想像し、後歌では、今はもはや訪ねて来ない男への恨みさえ無くなっていると嘆く。いずれも逢瀬に対する徹底的な諦めの心理が歌われている。

西行法師人々に百首歌よませ侍けるに  
あぢきなくつらき嵐の声もうしなど夕暮に待ちならひけん  
(新古今・恋三・1196・藤原定家)

建仁元年三月歌合に、遇不遇恋の心を  
恨みわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空  
(新古今・恋四・1302・寂蓮)

建仁元年三月歌合に、遇不遇恋の心を  
忘れじのことの葉いかにになりけんたのめし暮れは秋風ぞ吹く  
(新古今・恋四・1303・丹後)

家歌合に  
いつも聞く物とや人の思ふらんこぬ夕暮の秋風のこゑ  
(新古今・恋四・1310・藤原良経)

被忘恋の心を  
知られじなおなじ袖にはかよふともたが夕暮とたのむ秋風  
(新古今・恋四・1325・藤原家隆)

入道前関白太政大臣家の歌合に  
わが恋は今をかぎりと夕まぐれおぎ吹く風のおとづれてゆく  
(新古今・恋四・1308・俊恵)

新古今集に登場する夕暮の「待つ恋」の歌は、主に風の音によって待つ女性の悲哀寂寥感が引き立てられているものであり、1首目は「など夕暮に待ちならひけん」と、以前男を待った自分の行為を自省している。2首目は「待たじいまはの身なれども」と、男が来ないことを知り、もう「待つ」まいと決意しながら、以前の習慣によって夕暮になるとつい待ってしまうという微妙な心理を歌っている。「恨みわび」という表現は、千載集944番歌に見える「何せむに空頼めとて恨みけん」に共通し、作中の女性が今では「恨む」という行為にさえ倦怠であり、恨み果てた後の絶望と諦観が歌われている。<sup>4)</sup>

3・4・5 首目に見られる「秋風」は「飽き」を響かせ、6 首目では「荻吹く風」が恋の終焉を気付かせるものとなっている。<sup>5)</sup>

このように見ると、八代集における夕暮の「待つ」恋の歌は基本的に男が来ないという状況における、待つ女性の悲哀寂寥感を歌っている。<sup>6)</sup> また多くの場合は、作中の女性が男の訪れを断念し、逢瀬の再開に対してはもはや期待感がかけられていないことが特徴である。<sup>7)</sup>

### 3 中国の閨怨詩

中国文学における夕暮の閨怨詩の濫觴は、『詩経』・「王風」の「君子于役」に遡る。

君子于役、不知其期	君子役に于く、其の期を知らず
曷至哉	曷か至らんや
鷄棲于埭、日之夕矣	鷄は埭に棲む、日之夕べ
牛羊下来	牛羊の下り来る
君子于役、如之何勿思	君子役に于く、之を如何ぞ思ふ勿からんや

えき  
役に行かれた夫が、夕暮棲家に帰る鷄や牛羊と対照され、待つ女性の孤独を一層際立たせている。作中の女性は「之を如何ぞ思ふ勿からんや」と、夫の帰りをひたすら待ち続けている。

前掲した何思澄「奉和湘東王教班婕妤」が示すように、『玉台新詠』にはこの題材が多い。<sup>8)</sup>

佇立日已暮、戚戚苦人腸	ちよりつ 佇立日已に暮れ、せきせき として人の腸を苦しましむ ほらわた
	沈約「古意」(巻5)
向夕千愁起、自悔何嗟及	せんしゆう 夕に向ひて千愁起る、自ら悔るも何ぞ嗟及ばん ああ
	費昶「長門怨」(巻6)

離居苦無樂、向暮心悽悽 りきよ 離居楽しみ無きに苦しむ、暮に向ひて心悽悽 せいせい

吳均「與柳惲相贈答 離居苦無樂」(卷6)

欲知幽怨多、春閨深且暮 いうあん 幽怨の多きを知らんと欲せば、春閨深く且つ暮る しゆんけい

徐悱妻劉令嫺「答外詩 其二」(卷6)

日落<sup>レ</sup>応門閉、愁思<sup>レ</sup>百端生 しうしひやくたん 日は落ちて<sup>レ</sup>応門閉つ、愁思百端生ず

王叔英妻劉氏「雜詩 和婕妤怨」(卷8)

黄昏<sup>レ</sup>信使斷、銜怨<sup>レ</sup>心悽悽 しんし 黄昏<sup>レ</sup>信使斷ゆ、怨を銜みて心悽悽たり うらみ ふく

姚翻「詩三首 有期不至」(卷10)

これらの作例はいずれも男が訪ねて来ないという状況にあり、「愁思」「千愁」「幽怨」「怨を銜みて」「心悽悽」「人の腸を苦しましむ」などと、夕暮時に待つ女性の悲哀寂寥感が表現されている。但し、男の訪れを断念するような表現は特に見えず、逢瀬再開への願いもひそかに含まれていよう。

日落<sup>レ</sup>窗中坐、紅妝好顏色 さうちゆう 日落<sup>レ</sup>ちて窗中に坐す、紅妝<sup>レ</sup>顏色好し こうさう  
舞衣<sup>レ</sup>襞未縫、流黃覆不織 ふいひだ 舞衣<sup>レ</sup>襞たつも未だ縫はず、流黃<sup>レ</sup>覆うて織らず りうわうおほ  
蜻蛉草際飛、遊蜂花上食 せいれいさうさい 蜻蛉草際に飛び、遊蜂<sup>レ</sup>花上<sup>レ</sup>に食す いうほうくわじやう  
一遇長相思、願寄連翩翼 あひおも 一たび遇はんことを長く相思ふ、願はくは連翩 れんべん  
つばさ たる翼に寄せん

謝朓「贈王主簿」(卷4)

杏梁斜日照、餘暉映美人 きやうりやうしやじつ 杏梁斜日照り、餘暉美人に映ず よき  
開函脱宝釧、向鏡理<sup>レ</sup>紈巾 はこ 函を開きて宝釧を脱し、鏡に向つて紈巾<sup>レ</sup>を理む ほうせん  
游魚動池葉、舞鶴散階塵 いいうぎよ 游魚池葉を動かし、舞鶴<sup>レ</sup>階塵<sup>レ</sup>を散ず えふ  
空嗟千歲久、願得<sup>レ</sup>及陽春 さ 空しく嗟す千歳の久しきを、願はくは陽春<sup>レ</sup>に及 やうしゆん  
ぶこと得ん

皇太子簡文「擬落日窓中坐」(卷7)

この二首の末句に見られる「願はくは連翮たる翼に寄せん」「願はくは陽春に及ぶこと得ん」といった表現には、待つ女性の逢瀬の再開に対する強烈な期待感が詠われている。

此時阿嬌正嬌妬

独坐長門愁日暮

但願君恩顧妾深

豈惜黃金買詞賦

こ あきよう きよう と  
此の時阿嬌正に嬌妬し

どくざちようもん  
独坐長門日暮を愁ふ

くんおんしやう  
但だ願ふ君恩妾を顧みるの深きを

あに おうごん し ふ  
豈惜しまん黄金もて詞賦を買ふを

李白「白頭吟」

斜凭繡牀愁不動

紅銷帶緩綠鬟低

遼陽春尽無消息

夜合花前日又西

しうしやう うれ  
斜めに繡牀に凭りて愁へて動かず

りよくわんた  
紅銷え帶緩くして緑鬟低る

れうやう  
遼陽春尽きて消息無し

やがふくわぜん また  
夜合花前日又西す

白樂天「閨婦」

といった唐詩の作例も参照して分るように、夕暮の閨怨詩に描かれているのは専ら「愁・怨」の心情である。空閨にいる女性の深層的な心理においては、男が訪ねて来ない状況は可変的であり、逢瀬の再開には依然として期待感がかけられていることが言えよう。<sup>9)</sup>

#### 4 万葉集

万葉集における夕暮の「待つ恋」の歌も合わせて考察したい。

月を詠みき

玉垂の小簾の間通し一人居て見るしるしなき夕月夜かも

(万葉・巻7・1073・作者未詳)



という歌では、待つ女性の寂寥感が、一人で眺める夕月の光景が甲斐ないという嘆きに淡々と託されている。「清夜未云疲、珠簾聊可発」（清夜未だここに疲れず、珠簾聊かに発くべし、<sup>ひら</sup>虞騫「視月」）がその背景として指摘されている。<sup>10)</sup>

#### 露に寄せき

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜はふけぬとも

(万葉・巻10・2252・作者未詳)

あしひきの山を木高み夕月をいつかと君を待つが苦しき

(万葉・巻12・3008・作者未詳)

前歌は「濡れつつ来ませ」と、男の訪れを呼び掛け、後歌は「いつかと君を待つが苦しき」と、苦しみながら相手を執拗に待ち続けている。この2首は男が来るという前提で、作中の女性がその訪れを積極的に期待するものである。

夕されば床の辺去らぬ黄楊枕なにしか汝の主待ちかたき

(万葉・巻11・2503・作者未詳)

夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする

(万葉・巻11・2588・作者未詳)

夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ

(万葉・巻12・2922・作者未詳)

1首目はユーモラスな口調で男が訪ねて来ない理由を「黄楊枕」に問い掛け、2首目では初句「夕されば」が3句まで掛かり、去りし日に夕暮の訪れに伴う「君」への期待感が追憶される。<sup>11)</sup> 3首目は、末句「嬉しかりけれ」が「コソを承けて已然形で終止し、恋人の来ない不満・怨みを表現する」と指摘され、<sup>12)</sup> 逢瀬再開への期待感がその底流となっている。

万葉集における夕暮の「待つ恋」の歌には、必ずしも男が訪ねて来ないとい

う状況ではなく、全体的に悲哀寂寥感もあまり流露されていない。中国の閨怨詩の影響は専ら 1073 番歌に限られている。

## ま と め

万葉集とも参考し、八代集における夕暮の「待つ恋」の歌と、中国の閨怨詩との異同がはっきり現れてくる。

八代集では基本的に、男が訪ねて来ないという状況における待つ女性を歌い、濃厚な悲哀寂寥感が表出されている。この傾向は中国の夕暮の閨怨詩に共通し、万葉集に比べ、『玉台新詠』を初めとする中国詩の表現を多く受容したことによると思われる。

しかし、古今集 815 番歌は閨怨題材の何思澄「奉和湘東王教班婕妤」と哀傷題材の丁廋の妻「寡婦賦」が複合された作品であることが典型的に示すように、中国の夕暮の閨怨詩は専ら「愁・怨」の心情を歌い、待つ女性が嘆息する一方、逢瀬の再開に依然として期待感をかけているのに対し、八代集における夕暮の「待つ恋」の歌は専ら「諦め」の心情を歌い、作中の女性が逢瀬の再開に対して、もはや期待感をかけていないものが主流を占めている。悲哀・絶望感の度合いが中国の閨怨詩より遥かに高い。

平安以降の和歌は、中国詩の影響を多く受容しながら、やはり本質的には中国詩と異なる側面を持つことが、夕暮の「待つ恋」の歌にその一端が窺われよう。

## 〔注〕

- 1) 本発表で引用する万葉集と八代集の歌本文と番号は『新日本古典文学大系』（岩波書店）により、作者名は実名表記にした。中国詩の本文と訓読は『新釈漢文大系』（明治書院）による。芸文類聚は中華書局版により、私が訓読を付けた。
- 2) 鈴木広子「〈待つ〉考」（『古今和歌集表現論』笠間書院、2000）は、古今集「恋五」巻に見える「恋人の来訪が途絶えて時を経た『久しく待つ恋』」の歌において、「来ぬ人を待つ」という表現が重要であると指摘している。（217・224 ページ）
- 3) 詳しくは、拙稿「『床うち払ふ』の系譜—古今集八一五番歌における中国文学の背景を発端に」（『和漢比較文学』第 31 号、2003）を参照されたい。
- 4) 長谷川範彰「『遇不逢恋』の変容」（『立教大学日本文学』第 94 号、2005）は新古今集 1302・1303

番歌に見える「遇不遇（逢）恋」という題が、院政初期においては基本的に男性の立場からのものであるのに対し、新古今集では待つ女性のものになり、「（前略）歌々の作中人物は哀しみの時間を生き、詠われた心はいずれも儂い期待と絶望、諦観のあわいに存在している」と指摘している。（23ページ）

- 5) 田中幹子「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露一和漢朗詠集の秋の夕（秋興・秋晩）について」（『京都語文』第3号、1998）は「村上御時、八月許、上ひさしくわたらせ給はで、忍びてわたらせ給けるを、知らず顔にてことにひき待ける／さらでだにあやしきほどの夕暮に萩吹く風の音ぞ聞こゆる」（後拾遺・秋上・319・徽子女王／斎宮女御集・15・初句「秋の日の」）という歌について、上下の部分がそれぞれ白楽天の「<sup>へいていしし</sup>大抵四時 心総べて苦しきも、就中 <sup>なかんずくはらわた</sup>腸の断つは是れ秋天」（「暮立」）と「薄陽江頭夜客を送る、楓葉萩花秋瑟瑟」（「琵琶行」）を踏まえており、「萩吹く風」が村上天皇の訪れではなく、作者の孤独を感じさせるものであると指摘している。（62ページ）
- 6) 「頼めたりける人に／夕されば思ひぞ繁き待つ人の来むや来じやの定めなければ」（後撰・恋六・1062・よみ人しらず）という、男が訪れて来るかどうか分らず、まだ期待感が掛けられる歌、及び「題しらず／いかがふく身にしむ色のかはるかなたのむる暮れの松風の声」（新古今・恋三・1201・高倉）という、身に染む松風の音色も変わると不思議し、一途に待つ恋情の高揚を表現する歌は、極めて例外である。
- 7) 男の訪れに期待をかける作例として、「越前守景理、夕さりに来むといひて音せざりければよめる／夕露は浅茅がうへと見しものを袖におきても明かしつるかな」（後拾遺・恋二・682・大輔命婦）、「法性寺入道前関白太政大臣家歌合に／庭におふる夕かげ草のした露や暮れを待つまの涙なるらん」（新古今・恋三・1190・藤原道経）という2首が挙げられる。待つ甲斐が無く、夕暮の「露」に涙が象徴されている。
- 8) 森博行「魏・晋詩における『夕日』について」（『中国文学報』第25冊、1975）は『玉台新詠』巻1に所収される魏・徐幹「情詩」に見える「落日照階庭」（「落日階庭を照らす」）という表現が、「夕日」を意味する熟語が中国詩における最も早い作例の一つであり、帰らぬ夫を待つ女性の孤独と悲哀の心象風景として捉えられることを指摘している。
- 9) 松浦友久「唐詩に表われた女性像と女性観—『閨怨詩』の意味するもの」（『中国詩歌原論—比較詩学の主題に即して』大修館、1986）は、中国の閨怨詩が「かなえられるべき思慕がかなえられないゆえの、満たされざる情念」として描かれ、いわゆる「怨」とは、「状況が可変的・流動的」であると指摘している。（78ページ）
- 10) 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之『新日本古典文学大系 万葉集』（岩波書店、1999）。
- 11) 万葉集2588番歌について、前注（2）鈴木論文は「恋人は最早来ないとわかっているのに、心身は馴れ親しんだ（待つ）ことに傾いてしまうという歌である。（来ぬ人を待つ）」という表現は、このような万葉歌を母胎として生まれたものと見てよいであろう」と指摘している。（224ページ）男が来ないという現在の状況においては、この万葉歌は〈来ぬ人を待つ〉古今歌と共通するが、それがあくまで過去に「待つ」ことの名残として、「今も寝付かれない」と歌うに止まり、去りし日の期待感を追憶している点、古今歌の絶望感とは異なる。
- 12) 高木市之助・五味智英・大野晋『日本古典文学大系 万葉集』（岩波書店、1957）。

#### ＊討議要旨

郭南燕氏は、結論において、八代集を「諦め」の心情を歌い「悲哀・絶望感」が高いものと断じているが、むしろ諦め切れていないからこそ「絶望感」が高いのではないか。『源氏物語』に生霊の例も見

られるが、こうした判断を下すためには様々な視点からのアプローチが必要なのではないかと尋ね、発表者は、あくまでも中国閩怨詩との比較による結果であり、ひとつの「傾向」に過ぎない、と答えた。

松村雄二氏は、その「傾向」の違いを明確にするためにはさらに検討の余地があるだろう、たとえば民族性や歴史性などの違いへと収束させるのか、あるいは表現としての差異性を突き詰めるのか、和語と漢語の位相の違いはどうするのかなど、より具体的な考察が必要であろう、と提案した。